

成果報告書

記入日 2023 年 10 月 23 日

| | | |
|--|-----------------|---|
| フリガナ：(イコマ タダヒロ) 氏名： 生駒 忠大 | 渡航先国名 ブータン王国 | 留学先の所属機関：ブータン王立大学シェラブツェ校 帰国後の所属機関：京都大学 |
| 研究テーマ：農村課題解決を目指した実践型地域研究の応用：東ブータンにおける大学-地域連携による有機農業普及の実践から | | |
| 研究期間： 2022 年 4 月 ～ 2023 年 9 月 (1 年 6 ヶ月) | | |
| 研究成果 (概要) 東ブータンの農業実践および近年の急速な変容を約 1 年半にわたる現地調査から明らかにした上で、ブータン政府が掲揚する有機農業 100%国家という目標と現場の間に横たわる乖離を浮き彫りにした。さらに、農家とブータン王立大学シェラブツェ校の学生とが地域農業振興のために連携する実践を重ね、その仕組みづくりが試行された。一連の研究成果は同校の講義や国内学会にて発表した。 | | |
| 研究成果 (詳細) 研究着眼点の修正 ブータン王国 (以下、ブータン) は、世界で最初となる有機農業 100%国家の形成を目指して関係政策を履行している。渡航前の研究計画段階では、大学-地域 (農民・行政含む) 連携によって有機農業普及モデルを構築することを通して、農村課題解決のための実践型地域研究像として提示することを最上位の目標に据えていた。これは、ブータンの中央・地方政府が有機農業推進政策を具体的に実施しているという推定の下で思考した計画である。ところが、研究対象地域であるタシガン県に入ってみると、新型コロナウイルスによる影響もあり、国家による有機農業推進の実体的な影響は見られなかった。あまつさえ、対象地域では約 30 年前から当時の政府が配布した化学肥料に加えて、近年は駆虫薬や除草剤といった農薬が導入されるようになっており、それらの使用と強固に結合した主要作物の栽培体系となっていた。ここでいう主要作物とは、トウモロコシやジャガイモ、水稻等を意味し、自給用、商業用に栽培されている。また、同郡で 10 年以上活動する農業普及員に話を聞いた際、同氏が有機農業推進政策に否定的であったことから、中央政府と地方政府の間には、有機農業政策に係る認識の差があることがわかった。さらに、そもそもブータン中央政府が普及したい「有機農業」が如何なる農業体系であるかを鮮明にするためには、目下の農村で実践されている農業を詳細に把握する作業が求められるのであるが、既存の研究が指摘してきたようにブータンの在来農業に関する研究や資料は国内にもほとんど存在していなかった。 研究地域に入ることで明らかとなった以上の実情を踏まえ、研究枠組を以下のように修正した。すなわち、ブータン版の「有機農業」を検討するに先立ち、現在行われている農業をまず農民の視座から網羅的に把握することを本研究の第一課題に設定することとした。これは、有機農業政策関連文書で有機農業技術の基礎として明示的に着目されている「伝統的」農業に改めて焦点を当てる作業でもあった。 | | |

学術的成果

東ブータンにおける伝統的慣習に基づく環境共生型農業—林-農-畜結合—

本研究は、後述するように実践的な活動を研究の要素として織り込んだ点に特徴があり、その成果は文脈依存的である。その前提の上でも、最も重要な成果は、たとえ研究者であっても外国人の長期滞在をなかなか許すことがなかったブータンの、とりわけまだ実地研究が多くは行われていない極東の農村に約1年半居住することを通して、近年急速に社会経済的な変貌を遂げる農村社会構造や、自給・商品作物の栽培体系また牧畜に立脚する住民の生業を、地域の内側から通時的に素描した点にあると考える。この達成は、長期滞在型の研究を後押しした研究助成と受入先の存在があつてこそである。

本研究の主たる調査地であるバルツァム郡では、農家に身を置き諸活動に参加しながら当該地域の栽培作物の作付け体系や、日々生じる農作業、作物販売チャンネル、そして労働交換を基盤とした社会関係等を調査した。そこで明らかとなった農業の技術は、森林利用と牧畜との強固な結合を特徴とするものである。なかんずく地域の農業生態系は、地域内における林-農-畜系の物質循環によって下支えされていた。

殊にブータンの文脈で特筆されてきたのは、慣習的に管理・利用してきたソクシン (Sokshing) と呼ばれる落葉採集林である。1月には住民総出でソクシンの落葉をかき集め運搬して集積し、日々少しずつ牛舎に敷く。牛糞と落葉が朽ちて仕上がった厩肥が、作物栽培に欠かせない主要な栄養供給源となる。そして、ソクシンは牛の林間放牧のためにも重要な空間でもあつた。



先行研究において、ソクシンは田畑への栄養供給源として着目されてきたが、本研究では「林-農-畜」の結合というより広い農業生態系システムの中でその機能を有機的に位置付ける必要性を指摘したい。さらに落葉利用に係る工程や作業を具体的に報告した先行資料は欠如しており、本研究はその情報を加えることで貢献できると考える。

在来慣行農業の変容過程

以上のソクシンは「ブータンらしい」典型的な例である。1年以上の定点調査によって、こうした「伝統的」農業は、一方で社会経済状況の変化を受け技術的な変貌を遂げていることも重要である。顕在化した事例をいくつか挙げてみると、まず、①フィールドワークを開始する3.4年前を最後に、調査地域では牛耕の実践が途絶え、耕牛は完全に手押し耕耘機に取って代わられた(往時農作業において牛は、圃場、水田の耕起やトウモロコシの播種等幅広い用途に使用されていた。最後まで残った耕牛の仕事はジャガイモの収穫だったという)。次に、②殺生を忌み嫌う敬虔なチベット仏教徒でもあるブータン農民の間で駆虫薬が出回るようになった。ジャガイモにも増して換金作物としての重要性が高まっているキャベツやブロッコリー、カリフラワーといったアブラナ科野菜は、夏季に虫害に遭う。その間の栽培には家畜用の駆虫薬を転用する農家が出現してきている。さらに、③トウモロコシ畑の周辺で除草剤が散布された事例も観察された。

このような、近年観察される急激な農業の変貌の背景には、多様な要因が有機的に併存するが、農村人口の流出、農業機械の導入、商品作物の普及等を含む、いわゆる「近代化」が直接的に影響している。ブータンの農業と農村はいま急変の過渡にあり、これを注視し続ける研究が今後も重要である。

焼畑の現代的意味と農民の生存戦略

2023年6月、インドと国境を接するサムドゥップジョンカル県メンチャリ集落で2週間のフィールドワークを実施することができた。当該集落は、国内では名声を得ていた市民組織 Samdrup Jongkhar Initiative (SJI) による社会経済開発の対象地域であり、「GNH モデル集落」として知られている。同団体は、活動の一つの柱として有機農業推進を据えていたため、この集落では有機農業と農民の実践や意識の関係を検討することが可能であると考えた。

ここでは、社会経済状況を把握する質問票を用いた悉皆調査と、作物栽培に関する直接観察および聞き取り調査を行った。結果の詳細は分析中であるが、要点は、①集落では焼畑耕作が農民の生業にとって重要な位置にあること、②集落では農薬や化学肥料を使用する世帯はおらず、完全に有機農業が実現していた反面、③6割を超える農民は年々深刻となる虫害対策として駆虫薬の導入を希望していることが明らかとなった。つまり、先駆的に有機農業の取り入れを図ったメンチャリ集落では、技術的には焼畑に依存した「有機農業」が地域として実現しながらも、農民の意識としては、主体的に中央政府が理想化する「有機農業」を選択しているのではない実態が浮き彫りとなったのである。

以上の調査結果は、ブータン社会における有機農業と開発の現在地を示唆している。それだけでなく、森林破壊の温床という偏見の下で法規制の対象となってきた焼畑耕作を再照射する近年の研究に新たな材料を供すると考える。

社会的成果

カウンターパートであるブータン王立大学シェラブツェ校の教員や学生、またバルツァム郡の農民や郡役場と協力し、農業を通じた人材育成プログラムも試行してきた。その中である程度の成果が可視化された取り組みとして、シェラブツェ校の菜園活性化とバルツァム郡での援農プログラムが挙げられる。前者は、主に有機農業サークルの学生たちと取り組んだが、土地の整備を行うキックオフの日には、バルツァム郡の農家と農業機械公社の職員に耕耘機の指導者として参加してもらった。植付けから2ヶ月後には、収穫した野菜を大学近隣コミュニティで販売することもできた。この活動は有機農業サークルの学生が主導する形でいまでも継続されていると聞いている。後者は、同校の学生及び教員18名をバルツァム郡に招き、週末を通して稲の刈り取りと脱穀を体験してもらうという内容の活動である。

若者の農業・農村離れが急速に進行するブータンでは、農村と大学を接続する教育/地域開発プログラムの設置が急務であると考えられており、こうした農村-大学連携プログラムの制度化に向けて今後も微力ながら取り組んでいきたい。

これまでの研究成果発表

上述した研究成果は、シェラブツェ校の学生に対する講義(4回)と以下の国内学会を通して発表してきた。また、現在はブータンの有機農業政策と紐付けて投稿論文を英語で執筆している。

- ・「東ブータンにおける焼畑集落と有機農業の関係 -サムドゥップ・ジョンカル県メンチャリ集落の事例から-」日本ブータン学会第7回大会発表 (2023年10月21日)
- ・「ブータン東部におけるアブラナ科野菜の普及の実態とその要因 -タシガン県バルツァム郡を事例に-」日本国際開発学会第34回大会 (2023年11月11, 12日)

留学中の生活・研究でのトピックス

バルツァム郡滞在中は、終始一農家でホームステイを実施し、そこを拠点にあらゆる地域のイベントに顔を出した。農事や社会行事への参加を通して、可能な限り村人の一員になることを心がけ続けた。太陽に近いヒマラヤの傾斜地で何日にも亘る農作業や、ホストファミリーの牛8頭の世話、ホストファミリーの2歳児の遊び相手、冬場のソクシンの落葉集め、仏典を担いで3日間村々を渡り歩く宗教行事、コミュニティの祭事、葬儀、週末市での野菜販売等、その一つひとつが研究上欠かせなかつただけでなく、自分の価値観を突き動かす機会となった。毎日の日常が楽しく充実していた。



写真 2. 住民の1周忌後に交わされるアラと酒

しかし、最後まで苦しめられた現地の習慣があった。それは、いつでも酒を飲む（飲まなければならない）文化である。特に、村人はアラ（Ara）と呼ばれるトウモロコシから作った蒸留酒を好んだ。酒を飲むこと自体は嫌いではなく、むしろ好きであり弱くもないのだが、「いつでも」飲むのは少し話が違う。しかも、アラの場合は、アルコール度数が高く、現地ではグルブと呼ばれる常備用の小カップ一杯でできあがってしまう。それを、「飲みたい/飲みたくない」の否応を言わず飲ませるのが、かれらのおもてなしでもあった。直射日光が降り注ぐ畑仕事の休憩中や、体調不良の夜などにも、である。ブータンの東部では、食べ物や飲料を口に入れるときは、周囲を誘う。誘われた側は少なくとも3回断るのがマナーと教わった。つまり、断ることは「飲みたくない」という意志を表現するには弱い。何度も「飲め」と勧められるため、それを飲まないためには大変な根気を持って強い態度で「No」と言い続けなければならないのだが、そのやりとりはとても体力を要する。そもそも、「飲める」人は飲まねばならないというある種の規範も存在する。結局いつも根負けしてどのような状況でも酒を受けた。今振り返ると、この酒が翌朝体から抜けるとともに重要なひらめきやアイデアが頭から消えていたことがあったように思う。

今後の社会貢献

実践と研究の両輪から農業・農村問題を紐解き、その解決方策を現場に生きる農民の視座から生み出す営為をライフワークとして続けていきたい気持ちは、今回のフィールドワークを通してより強化された。研究者としては、当面の間、本研究を整理した2本の論文を英語で執筆し学術誌に掲載すること、そして本研究をこれまでのフィリピンと宮崎県綾町を対象とした研究と統合した博士論文を研究科に提出することに注力する。その後、博士論文を一般向けの書籍として修正し出版したい。博士課程で取り組んできた有機農業普及と地域開発というテーマは、昨今国内の政策転換を背景に日本国民の間でも注目度が増しており、一般向けの発信の重要性は増していると感じている。

他方で、本研究を通して、実践者としての能力と経験の不足を痛感させられた。そこで、一度国際協力の前線で実務経験を積むべく就職を決断し、いまは都内においてフルタイムで仕事をしている。上記の研究活動との同時並行に取り組むことで、双方に対する相乗効果を生み出していきたい。ゆくゆくは、実践と研究を橋渡しする研究者として、国内外の研究機関で活躍したいと考えている。